

創設十周年を祝す

小島吉雄

(大阪大学名誉教授)

国文学研究資料館が本年で創設十周年を迎えられたという。まことに慶祝の至りである。由来、わが国では、十年を一と区ぎりとする慣習がある。当研究資料館もようやく十年目にして館活動の基礎づくりをなし遂げ、さらに次の段階への飛躍発展を踏み出しつつある。

顧りみれば、国文学研究資料館の建設が日本学会議の議決を経て文部省に提出されるのに約十年、さらにそれが具体化されて創設に至るまでに約五年の歳月を費しているが、その間にあって、わが国文学者の諸君はその実現のためによく一致協力されたのであって、このことは当局側をも驚かすほどであったという。当初のわれわれの企画の理想は、学会議の政府への勧告の内容が物語っているようにまことに大きかったのであったが、予算の関係や当局の意向等もあって、理想どおりには至らなかった。それでも創設後、着々成果をあげられ、今日に至ったのは、偏えに館員諸氏の努力のたまものであり、学界あげての協力のおかげであるといわざるを得ない。こいねがわくは、この体制が永く持続せられ、今後もどしどし新しい科学の力を利用して、われわれが夢み企画した理想を実現されむことを切に希望すると共に、その実現への努力を若い諸君に期待するのである。

ここにこれをもって十周年を迎えられるに当たっての祝辞とし、今後への期待とする。

国文学研究資料館創設十周年を迎えて

石井良助

(創価大学教授)

本年5月1日に国文学研究資料館は創設十周年を迎えた。昭和41年日本学術会議の政府への勧告により、学術審議会で審議して、45年に同審議会は緊急に国文学研究資料センターを設置するよう文部大臣に答申した。もちろん、その設置の重要性を認めてのことであるが、国文学関係の23の学会のすべてがその設立に大きく協力し、すでに自腹で、重要な資料をある程度整理していたことがだいぶ文部省当局を動かしたようである。設置の場所について問題があったが、結局文部省史料館のあった現在の敷地に、同館の了解を得て、決定したのである。

創立についての準備委員会が設けられたが、研究資料の蒐集整理等国文学プロパーの事は久松先生の部会で行ない、雑務はわたくしの部会で行ない、重要事項は全体会議できめることになった。

この委員会で、本館の名称が定まった。学術会議の勧告では「国語・国文学研究資料センター(仮称)」とあり、学術審議会の答申では国語という言葉がはずされたが、委員会では「国文学研究資料館」と改めた。本館にはコンピューターがあり、いよいよ威力を発揮する段階になったが、その設置は文部省の奨めによるものである。

なお、学術審議会では、本館の組織につき、文部省より高エネルギー物理学研究所の例にならって教授制をとっては如何という示唆があり、それに決定したのである。

国文学の基礎的文献資料の整備と保存とが重要であることについては、何人も異論はないであろうし、本館がその方面で大きな業績をあげていることはいうまでもないが、そのほか、形式的には本館の目的とされていないが、世界の現状において、外国人の日本文学の研究に対する援助や外国人との共同研究等により、日本人ないしその国民性をよりよく世界の人々に理解してもらうことはきわめて重要であると考え。本館では外国人研究員を迎え、また国際日本文学研究集會を昭和52年より毎年開いており、大きな成果をあげているが、将来これらがますます拡充されるよう期待する。

前館長市古貞次氏は創設以来十年間、館員諸氏の協力の下に本館の基礎固めという困難な任務を全うされて、本年4月に勇退された。そのご功績はまことに輝かしいものである。同氏および同氏を助けられた館員諸氏のご労苦に対し心より御礼申上げるとともに、本館がますます発展するよう祈念する次第である。

(国文学研究資料館評議員会議議長)

市古前館長に聞く (インタビュー)

昭和57年7月15日 国文学研究資料館にて

市古貞次

質問者

福田 秀一 (文献資料部)

山中 光一 (研究情報部)

岡 雅彦 (整理閲覧部)

大野 瑞男 (史料館)

但し主として福田が質問した。

- | | |
|-----------------|----|
| 1. 創設まで | 3 |
| 2. 設立から運営へ..... | 10 |
| 3. 開館から充実へ..... | 13 |
| 4. 終りに | 23 |

—— 市古先生、きょうはお忙しいところ、ありがとうございます。国文学研究資料館が創設されて今年で満10年ということで、創設からこの4月1日まで足掛け11年、館長をお勤めになり、しかも創設前から当館ができるまでいろいろご尽力くださり、その辺の事情にも精通しておられる市古先生に、当館が国文学者の要望や先達のいろいろなご配慮があつてできるに至った経緯を伺い、その後、この10年間の館長としてのいろいろなご経験をふりかえってお話しいただければと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

1. 創 設 ま で

—— そこでまず、この国文学研究資料館ができるに至った経緯をお話しくださいませんか。

市古 昭和10年前後に佐佐木信綱さんが、国文学の資料センターのようなものがあるべきであると何かの雑誌にお書きになった。また、久松先生に伺ったところによると、藤村作先生も、やはり同じように資料館というものはぜひ作ら



なければいけないとお考えになっていたようですが、機運が熟さなくて、そのままになっていました。

ところが、昭和20

年、太平洋戦争のためにいろいろな所で文化財が失われた。彰考館などがその著しい例ですが、そういうことで、もう少し写真、複写をとっておかなければいけない、そのために施設をというようなことを、当時心ある人々が考えていたわけです。ただ、それが具体的に実を結ばないで、實際上そういう問題が具体的にやってきたのは昭和38～39年です。当時、学会会議の会員だった小島吉雄さんがそういうことを考えて、久松先生や佐々木(八郎)さんともいろいろ相談なさって、学会会議に昭和38年ごろ国語国文学研究センターの設置を初めて提案なさったんですが、なかなか順調に行かなかったようで、やっと40年ごろ提案が再検討されたようです。これについては小島さんのご苦勞は大変なものだったと伺っています。

41年5月ごろ、日本学術会議の講堂でシンポジウムをやったことがあります。東京でお話しになったのが中田祝夫さん、それに私です。京都でももう一回開かれたと、後で聞いていますが、そのとき東京で私どもがしゃべったのは、文化財がどんどんなくなっていくが、そういうものを後の時代まで残すのが現代のわれわれの責任じゃないか。しかし、本を集めるのは困難だから、せめてマイクロフィルムなどで撮っておいて、今後火事などの災害に遭っても(資料が)残るように、次の時代の人々に受け渡しができるようにしたい、というようなことだったと記憶しています。

学術会議のほうでは小委員会ができて、当時学術会議会員だった小島さんと永積(安明)さんの二人と、一般の国文学者ということで久松潜一博士、佐々木八郎博士、岩淵悦太郎さん、私の、合わせて6人が委員になりました。そして、昭和41年11月に学術会議の政府への勧告が出されました。それから後が、やや具体的な運動ということになります。

そのようにして、学術会議の勧告は政府に届けられたのですが、それだけではだめで、われわれのほうでもっと機運を盛り立てなければいけないというので、「国語・国文学研究資料センター設立推進連絡協議会」というのが、昭和42年くらいにできました。このセンター設立に最初から非常に熱心だったのは久松先生で、この協議会も先生の提唱によるものだったと思います。協議会は国語国文学関係の二十余の学会の代表者が集まって設けた組織で、事務局は初めは早稲田大学に置かれていました。でも43年、44年はどういう活動をしていたか、ほとんど記憶に残っていません。と言いますのは、このころは東大紛争があり、私も協議会に出席できま

せんでしたし、他の大学にも種々の事情があったようで、それほど活発に動いていなかったと思います。協議会がほんとうに動き出したのは45年からだと言ってもよいのではないのでしょうか。その間に、事務局は國學院大学の臼田研究室のほうへ移りましたが、それから後は臼田さんのご努力もあって非常に精力的・組織的に目標に向かって進んで行ったように思います。

—— 私もその連絡協議会に、確か和歌文学会からの派遣で44年ごろから出ていました。それで手帳を見たり、あるいは手許にある中世文学会の機関誌『中世文学』に当たったりしますと、42年の5月の総会で小島(吉雄)先生からこの話が初めて出て、そうした機関の設立に満場一致で賛成した上、協議会に代表者を出すこととその事務局運営費として年額2,000円を據出することを承認しています。43年度も例えば6月の総会で「国語・国文学資料センターの件」と題して小島・久松両先生からご報告があり、以後も毎回の委員会や総会でこの件について経過報告がなされていますし、44年には署名を集めたりしています。そして、この年からは今申しましたように手帳に書いてあるのですが、毎月1回集まって久松先生や佐々木(八郎)さん、西尾(光雄)さんなどを囲んで、文部省その他との折衝の進行状況を伺ったり、皆で対策意見を出しあったりしています。

市古 そうでしたか。ところで文部省では、学術審議会を通さないといけないというので、そちらのほうに働きかけ、45年9月に学術審議会から「設置すべきである」という報告が出ました。それから後、研究者たちの活動が非常に活発になってきました。文部省がそれを積極的に受け入れてくれた理由は、国文学はいろいろな学会に分かれていて、ばらばらした統一のな

準備調査会のこと

いところだと思われていた。それが二十幾つの学会が共同して協議会を作り、しかもその代表に久松潜一博士がなられ、一つのまとまった形で運動を強力に進めたことだ、と聞いているんです。文部省では、こんなに国文学界がまとまるとは、とびっくりしたようです。

とにかく、学術審議会の報告が出て、45年ぐらいから推進連絡協議会が活発に行なわれるようになって、大勢の若い人たちにも集まってもらったりしました。また、その前段階となるかもしれないかもしれませんが、複写すべき、あるいは複写できる文献はどういうものかというリストを、各学会、例えば和歌文学会の人や近世文学会の人とかに出していただきました。そしてそういうものを文部省に提出しています。

市古 学術審議会が通った段階で、46年に文部省の中に準備調査会ができ、学者の方々約20名が協力者としてあげられ、何回か会合を開きました。そこで文部省からもいろいろなことを諮問され、われわれもどういうことを望んでいるか、話した記憶があります。

—— その際は、設立しようという方向で、どのような形のものを作るかなどについての検討をしたわけですね。

市古 そうです。もう一つは、文部省ではそういうことは専門じゃないので、どんなものをどうこしらえるのかも分らない。会議の席で出た話題で一番よく覚えてるのは、国文学の作品の点数は一体何点ですかと質問されたことで。(笑)

国文学研究資料センター（仮称） 設置についてのお願ひ

国文学の古典は、わが国民文化の精神として世界に誇るべきものであり、その研究は日本文化の正しい認識と新しい発展のために、きわめて重要なものである。

しかるに、その資料の保存や利用は、現在には不十分・不満足な状態にある。例えば、震災戦災による損失はいうまでもない。また、戦後社会の変動による所在の不明や国外流出等のことが生じ、時には保存管理が不十分のまま汚損・虫害・放佚の恐れもある。その上、全国各地に散在する資料を調査閲覧するのに非常に困難不便があり、研究の能率が十分にあげられないうらみがある。

かかる不安と不便にかんがみて、われわれは「国文学研究資料センター（仮称）」の設置を強く希望するに至った。国語国文学界の二十数学会は一致して本センターの設立推進に協力しており、一日も早く本センターの設置を実現して、その成果を国民に還元することは、今日の急務であるとともに、後代への国民的使命でもあると信ずる。また、海外に目を転ずれば、日本文学研究は近年いよいよよさかんで、これら研究者との情報交換による国際的文化交流への貢献は、きわめて大きい。

本センターの設置について、日本学術会議から内閣総理大臣に勧告されたのは、昭和四十一年十二月である。それと前後して、われわれはこの「連絡協議会」を結成し、右に述べたように積極的に活動を開始した。その第一として、本センター設置の際には収集すべき文献資料のサンプル調査を行ない、第一次「文献目録一覧表」（古代から近世までの四一九点）を本年四月、六月に文部省に提出した。この収集計画は種類として約六万点（異本等を含め約五十万点）の推定である。

学術審議会学術研究体制特別委員会は、日本学術会議から設立勧告された研究所のうち、本センターを最優先的にとりあげることと認め、この性格に国文学研究の情報センターの意義を重視し、電算機等の導入による処理体制を加え、基本構想をまとめ、文部大臣に報告した。くり返して言うが、国文学の古典の資料の保存・収集および共同利用・情報提供のための本センターの設置は緊急を要し、今日その努力を怠ることは、悔いを永久にこのすことになろう。わが国においてはじめて実現し得るこの国家的事業を促進するため、広く国民各方面のご支援ご助力をお願いする次第である。

昭和四十五年十月

国文学研究資料センター設立推進連絡協議会

代表 久松 潜一

事務局 東京都渋谷区東四丁目一〇番二八号
国学院大学日本文学部二(白田教授)研究室内

—— つまりマイクロフィルムに撮るというが、どれくらいの点数かということですね。

市古 ええ。それには誰も答えられなかったので、『国書総目録』の項目数つまり作品数が大体60万点。国文学関係をその中の10分の1と見れば6万点だ。しかし国文学の範囲は時によって動くものであるから、7～8万点であろう。そして、それぞれについていろいろな本(諸本)があって、そういうものを全部撮らなければならないから、大変な数になるであろう。100万点ぐらいにはなるんじゃないか」と私が答えた記憶があります。

—— 作品伝本数約100万ということですね。

市古 ええ。それについては誰も反対する人はいませんでした。(笑) 私も、国文学関係というその範囲が曖昧ですから、一体どういう範囲をとって数えたかと聞かれても困るんです。そういうことで、それが公称になってどのくらいという数字が出ているかと思うんですが、あんまり根拠はないんです。これ、書かないほうがいいんじゃないですか。(笑)

それからもう一つ、準備調査会で問題になったのは情報処理の問題で、コンピューターを入れたらどうだろうかということで、これは文部省のほうから言ってくれました。人づてに聞いたところによると、当時の次官、天城勲さんが大変珍しいもの好きで、(笑) その案を出されたのだそうです。それについては国文学者と情報処理関係の人とが集まって、話し合う必要があるということになりました。国文では実際に折衝に当たったのは久松潜一博士と私です。向こう(情報処理側)から出てこられたのは、小谷(正雄)さん、国井(利泰)さんのお二人でした。辻村(明)さんが後で出てきたこともありました。

そのとき、国文学者はコンピューターで何を

望むかと聞かれまして、われわれは困ってしまいました。(笑) これはもちろん久松先生が主として対応なさったのですが、話が食い違って合わないんです。たとえば「本(マイクロ)をご覧になって、何ページと言ったらすぐ出てくるようなことをお考えですか。それはできますよ」と言われ、「いや、私は本というものは頭から見ていきますので、それは考えたことはありません」と私が答えたところ、これは論外なやつだというような顔をされたことがあります。(笑) 一事が万事、こんな具合なんです。

(大野) 私も傍聴させていただきました。

市古 そうでしたか。後で久松先生と二人で相談しまして、われわれとしては1億円もかかるようなものをやるよりも、カードをとったなら10円のものなら1千万枚できるであろう。そのほうがいいじゃないか——などと、貧乏性で考えたりしたんですが、将来の学問の発達ということからすると、ここで思い切ってコンピューターを入れたほうがいいんじゃないでしょうかと先生に申し上げたら、先生もそれはそうだとおっしゃって、コンピューター導入が決まりました。もちろん会議を通してあるので、そこだけで決まったと言うと悪いんですが、裏話は大体そういうことだったんです。文部省の概算要求の中に情報処理関係の芽のようなものが含まれているのはそのためです。

「国文学研究資料館」の名称や 設置の形態・場所など

市古 もう一つ、名前について申し上げますと、初めは「国語・国文学研究資料センター」でしたが、文部省の学術審議会の段階で「国文学研究資料センター」になりました。さて、いよいよ作るに際して、一体どういう名前がよかろ

うか、「古典文学資料センター」「古典文学館」などいろいろ案が出されましたが、そのとき私は、「国文学研究資料館」という名前にしてもらいたい、情報に関してはわれわれは近代文学を決して放棄しているわけではない。ずっと現代に至るまでの日本文学であるから、古典と近代に分けることは不賛成であると考えていました。そういう意向は皆さんにも強くて、結局「国文学研究資料館」の名前に落ち着きました。それも「日本文学」「国文学」などいろいろありまして、私はむしろ「日本文学」のほうが好きなんです。が、「国文学」のほうがポピュラーであるとか、いろいろなことがあったと思います。これは全体の会議で決まりました。

—— 「資料センター」から「資料館」に変わったことについては何か。

市古 少し戻るんですが、46年初めごろから、国立大学の共同利用機関の形をとったらどうだということを渋谷敬三審議官から言われました。国文学界では、文献資料を収集して文化財の保存をはかり、研究者に寄与することを主として考えました。それに加えて研究情報の収集・整理ということもあったわけですが、われわれのほうとしては、何しろできることが第一だと考えていたのです。そういうわけで大学の共同利用機関として設置することについては、それまで思ってもみなかったのですが、そういうことになればもっといいんじゃないかという考えで、喜んで了承したわけです。当時、文部省では高エネルギー物理学研究所が一つきただけで、同様な共同利用の研究機関を次々と作っていきたいという意向もあったようですが、それで国文学研究資料館がその第2号になったのです。

そういう形態の変化に伴って、ただ集めるということではなく、研究資料調査とか、研究的

な要素をかなり加えていきました。それで、「センター」では小さいから、「館」のほうがいいんじゃないかということでした。「館」の名前は恐らく文部省の発想だと思います。「センター」というのは、文部省では、大学に附置とか、もっと小さいものを指すんです。われわれは初めから、そして運動の段階でも、「資料センター」と言っており、そこまでは考えていなかったのですが、こういう軌道修正は結果においてよかったと思うんです。

—— 46年の通称“準備調査会”の段階で、共同利用機関の形態がだいたい固まったわけですか。

市古 そうです。7月ぐらいには固まったんじゃないかと思います。

—— それでもまだ、いつできるか、どこに作るかは決まっていなかったんですね。

市古 場所については、もう少し前から、運動し続けている段階で、どこか受入れ先を探さなきゃいけないと久松先生がご心配になって、上野の図書館の跡はどうであろうかと、亡くなった国会図書館次長の斎藤毅さんのところへ行って、打診したことがあります。ただ、そういうことになると国会図書館のほうでも簡単に返事はできないし、いろいろな問題がありますので、色よい返事は必ずしも得られませんでした。

そのうち(創設の)1年前ぐらい、国立大学の共同利用機関ということで踏み切ったころじゃないかと私は記憶しますが、戸越の文部省史料館に併置してはどうだろうかという話がありました。そのことについては推進連絡協議会に一遍かけたことがありますね。

—— はい。私も協議会で伺った覚えがあります。

市古 久松先生や私の考え方は、とにかく場

所がないと困る。第一、予算もつかないので、そういうこと(文部省案)でいいのではないか。史料館のほうも近世文書を集めているところだから、そこと一緒になってやることも意味があるだろうということで、承知したと思います。

ただ、その際、史料館のほうではいろいろ問題があったそうですが、当時そういう話は全然聞いておりませんで、すらすらと事が運んだのだとばかり思っていました。その間苦労なされたのは石井(良助)さんでしょうか。そのことは後で石井さんから聞いただけです。

—— 推進連絡協議会は、それについてどうこう意見を出す場ではないので、そういう経緯のご報告を伺った覚えはあります。

市古 そうだと思いますね。そこで否決されても困るんです。

—— とにかくできることが必要だ、もう何年も運動してきたことだし、この辺で実現を見たいものだという強い希望が共通にあって、この土地に作ってもらう話は、皆さんもすんなり賛成したんだろうと思います。

ただ、そのときの反応の中に、何も無いところに建てるほうがいいとも言えるが、何らかの路線のあるところに行くのもよく、一長一短だ。その優劣は論じられず、一方は実現の可能性があり、一方は実現の可能性が当分ないんだから、可能性のあるほうを採ろうじゃないかという意見が出たように思います。

敷地の由来

当館が所在する戸越(とごし)の地名の起りは、“江戸越え”とか“谷戸越え”の地であるというのが、確証はない。江戸時代の戸越村周辺は、江戸に隣接してしたために、大名や旗本などの屋敷が点在していた。当館の敷地となっている場所もその一つで、寛文2(1662)年ごろから肥後熊本藩主細川家の拝領屋敷であった。細川家は初め7,200坪と、やや広い土地を拝領した。後にほぼ半分を上地したが、拝領地に隣接して抱屋敷をもっており、その総面積は2万坪を超えていたと推測される。その造園は国元の水前寺公園と同じ手法を用いたといわれ、現在も残る池はいくつかの落差をつけて戸越公園の池と一つにつながって風致の中心となり、そのほか岩石や樹木のたたずまいも“ひと日ふた日に見尽すべくもなし”と評された。この池水は、細川家が玉川上水を分水して通じたもので、農業用水としても重視されたという。

細川家のあと、文化3(1806)年に石見国浜田松平家、天保13(1842)年に伊予国松山松平家へと転じて明治維新を迎えた。

明治政府は、東京府内の諸藩の屋敷地を整理して、上地させた。当館所在の屋敷地も恐らく民間に払下げられた後に、何人かの手を経て、明治26(1893)年ごろに堀田瑞松から三井銀行へ所有者が変っている。同36年に三井同族会が買得し、これを戸越別邸と称し、能楽堂や農園が作られた。その後、大正5(1916)年から三井文庫をこの地に建設し始め、11年に完成した。現在正門を入った右側に残っている書庫は、同9年に建てられたもので、三井家では昭和7(1932)年に戸越小学校と戸越公園分を荏原町に寄付する一方、敷地の一部を分譲売却したため、当初の半分ぐらいに縮少した。

昭和24年に文部省史料館が発足するに当り、建物を、翌々年に土地を、買上げた。

同47年に当館の設立に際して、その敷地を引継ぎ、建物を新営して今日に至っている。

市古 もう一つは、筑波学園都市ではという案がありました。筑波にはいくらでも用地があつて、あそこならできたんですが、それは話に出しませんでした。国文学者は巨大な機械を持っているわけではないので、そういう場所に行って果してどれくらいの人が利用してくれるであろうか。中の館員の問題じゃなくて、むしろ利用者の問題を考えました。宿泊設備もあるかどうか分るところですし、開設当初はまだそれほど利用のメリットもないわけですから、なるべくなら都内がいいといういきさつもありました。

陳情運動から設立へ

市古 そういうことで運動がだんだん緒に就いて、一番大変だったのは、概算要求を通すための昭和46年12月です。国会関係、大蔵省関係などに陳情しました。国文学者の方々にも推進連絡協議会を通じて、そういう運動にご参加を願いました。延べにして恐らく数百人になるだろうと思います。一番多い時で1日80人ぐらい出てもらいました。そういう方々には、今もって感

謝しています。

なお、資料館の創設については、文教に深い関心と理解を持っておられた国会議員の、当初

政界手帳

◇「ノーベル賞 獲れているはずの保利長官も川早くも一もん賞。提案者として 攻防は、相手エラーによる目加藤清二(社会)正木良明(公民党の免取点といったところ明)竹本孫一(民社)三氏のなか。」

◇「社会党大会は最終日も朝前がつらねてあったのがゴトの起り。「加藤クンは衆院産業、からゴタゴタ続き。とくに、新公害対策特別委員長として四日書記長には石橋政嗣氏ですんなり決まるとみられていたところ、左派の社会主義協会から嶋人、正木、竹本クンは提案者であると同時に、法案に対して野崎謙氏(元九大教授)、右派の

川端さんらトツツツの陳情

と趣旨を説明すると、久松さんも「せめて来年度からは調査費だけでもつけてほしい」と訴えた。予算陳情の応対には手な



川端 康成氏



久松 潜一氏

衆院の関係八委員会がこの朝会 同理事會を開いたが、野党側が提出した共同対案の取り扱いで

国文学資料センターが本決まり

亡失のおそれが強い国文学古典の文献・資料を保存するための「国文学研究資料センター」の設立が二十八日の四十六年度予算案の文部、大蔵両事務次官折衝で本決まりとなった。四十六年度はとりあえず約一千万円で設立準備にとりかかり、四十九年には東京品川区に開所する計画。

学術審議会が九月、坂田文相に報告した基本構想によると、同センターは江戸時代まで(明治以降は近代文学館が担当)の資料を扱い、古代からの著名作品の所在調査、収集や整理、保存するほか、コンピュータを利用して情報相談のサービスを行なう。文部省付属の国立機関とし、品川区戸越公園の文部省史料館(旧三井文庫)の敷地に八千六百平方メートルのセンターを建設する。総工費約七億円。

(上) 東京新聞 昭和45年
12月3日付
(左) 毎日新聞 昭和45年
12月29日付

からのご配慮を忘れることができません。このことについては古川清彦氏が書くでしょうからここには詳しく申しませんが、一方、総理大臣(故佐藤栄作氏)をはじめ、要職にある多くの方にも働きかけをしました。当時の官房長官——初めは保利(茂)さん、途中からは竹下(登)さん——がよく理解して、便宜を計ってくださったことを覚えています。

寒い12月のことなのに、80歳近い久松先生がいつも先頭に立たれてよくなさったとつくづく思います。私はただ先生のお伴をただけで、国文学者のそういう熱意が実ったんだと思います。国会・官界を動かして、予想外に早く47年初めに内示のあった際、大体通るという見通しがつきました。

当時、並行して設立希望の運動をしていたのが歴史民俗博物館(注、今の国立歴史民俗博物館)と民族学研究博物館(注、今の国立民族学博物館)です。スタートが一番早かったのは歴史民俗博物館じゃなかったかと思いますが、一番乗りをしたのが国文学研究資料館なものですから、どういう方法でやったのかと、いろいろな人によく聞かれました。英・独・仏文学の方々が外国文学研究センターの運動を起こされたことがあり、その人たちにも、一体どうやったのか、詳しく話してもらいたいと言われ、私よりも古川清彦君のほうがよく知っているからと逃げたことがあります。いずれにしても、じっと座って声を大にして怒鳴っているだけではだめで、足でかせがなくてはだめですよと言った覚えがあります。じかに会って理解してもらわなくてはとてもできません。

47年2月に準備調査会の最後の会議が開かれ、その席で、設立が実現した際は館長に私を当てるということが提案され、ご承認を得ました。

この年は国会が難航して、年度末までに成立しなかった時です。

—— 先生が3月に東大を停年でお辞めになった年ですね。

市古 そうです。私はよそへ行く予定をあわて取り消したりしました。(就職先は)だいたい前年に決めるものですから。ここの設立のことが通ったのは4月20日ぐらいですね。延びたんです。

—— 予算審議の遅れか何かで、4月1日にできずに、1ト月遅れてしまいましたね。

市古 ええ。それで5月1日に設立ということになりました。

2. 設立から運営へ

—— 設立年度のことで特に印象に残っていることをお伺いしたいのですが……。

市古 5月1日から館長になったわけですが、3月、4月ごろからスタッフを考え出しました。しかし、開館がいつになるか分からないので大変頼みにくかった。確か創設時には、教官では古川君だけじゃなかったかしら。

—— それと田嶋さんが5月1日就任だと思います。事務官のほうは……。

市古 事務官は吉野部長、川崎庶務課長、会計課長が宮崎さんだったと思います。

—— それと史料館から引き続きの人達もおられたわけですね。

(大野) 史料館のほうはおりました。管理部には草壁さんなんかいましたね。

市古 草壁君・寺尾君などは早かったね。

—— 記録によれば、草壁・寺尾両氏は5月1日就任です。

市古 当時、建物がないので、今の史料館の

建物の前にプレハブを建ててそれに入るという話があり、私はそれを覚悟していたのです。ところが、史料館のほうで、その少し前(注、46年12月)におやめになった小和田(武紀)館長の部屋を空けるから狭いけれどどうぞ、と言ってくれたので、私は入ってすぐ左側のところに入り、プレハブは建てないで済みました。いろいろな関係があるものですから、簡単にわれわれがそこに入るというわけにもいかなかったんです。事務関係でどのようになさったか、細かいいきさつは、何にも知らないんです。

—— それでいわゆる北館仮寓時代があるわけですが、北館は民族資料の収蔵庫だったそうですね。ただ、今伺うと小和田館長の部屋などもあったそうですね。

(大野) ええ。今史料館の閲覧室になっているところ、1階に、史料館長室と事務室がありました。それを市古館長と管理部のスタッフがお使いになりました。

—— そして2階を片づけてくださったのですか。

(大野) そうです。2階には民族関係のものがありまして、少し空けました。

市古 初めのころは何もすることがないんです。(笑) ただ、どういう人に助教授に来てもらおうか、助手に誰を採ろうか、評議員には誰になってもらおうかということが一番苦勞の種でした。バランスを考えなければなりませんから。この資料館は全国の大学の学者たちの協力によってできたものですから、一つの大学に偏することは避けなければいけない。それと、できた当時、ある私立大学の教授から、資料館は国立だから国立の大学の教官にしか使わせないんじゃないかという話が出たりしました。高エネルギー物理学研究所がそのように誤解されたこ

とがあるんだそうです。それで私は、別にそんなことは考えていない。大学の共同利用機関であるから、国公私立の区別はつけない。あらゆる人たちに使ってもらいたいということを、はっきりと申し上げました。

—— 確か、法律上は国立大学の共同利用機関だが、実質は大学の、というよりもっと広く、国文学者の共同利用機関として運営するとおっしゃいましたね。

市古 ええ。これは成り立ちから言ってそうなんです。学会がそれぞれ非常に協力してくださったことは忘れてはならない。ただ、何と言っても法律上は国立大学の共同利用機関ですから、そこに一つの線は引かなければいけない。しかし、なるべくそういう区別はなくそうというので、当館の概要などには「全国の大学の教員その他の者で……」であり「国立大学……」とは書いていないわけです。

そんなことで、評議員会議のメンバー、新しく来られる方など、いろいろな名簿を見て決めました。それで一番困ったのは、相談する人がいないことです。久松先生には多少ご相談しましたが、とにかく、いろいろな資料・情報を集め、よい方々に来てもらうことに苦心しました。

一応評議員を内定した段階で、運営協議会というものがあることを知りました。けれどもそれは必ずしも設けなくてもよいという文部省側のご意向でしたし、私自身評議員の方方で十分だと考えましたから、当分の間見合わせることにしたのです。

ただ、資料館として、共同利用機関が七つも八つもできた段階で、やはり運営協議会があるほうが良いと思うようになったのは、3年ぐらい前からです。置こうとはしたのですが、その度ごとに種々の支障があつて、やっと今年設け

られたわけです。

開館準備時代

市古 苦心したこととしては、建築の問題もありますが、座談会で管理部長がお話しになるかと思しますので略します。また、開館までに資料をある程度集めなければいけないということがありました。文献資料部はマイクロフィルムの撮影に全力を集中してもらい、当時の研究情報部は情報としての学会誌などをそれぞれ寄贈依頼することをはじめ、情報収集に苦心したようです。特に文献資料部には年間5千点の文献資料を調査収集するというノルマがあったわけで、これは非常にきついと大久保部長に何回か言われましたが、そんなことはないからやれと押しつけたのは、実は私です。5千点を3千点に下げると予算が少なくなってしまう。そうすると不便なことが種々出てくるのは目に見えています。仕事の量を減らすということはあらゆる場合に避けるべきだというのが私の考えでした。無理なこととは承知しながら、そして申訳ないとは思いながらも、心にもなく、要領よく点数を撮れとか、いろいろなことを言ったわけです。だけど、とにかくそれに協調し努力してくださったことにたいへん感謝しています。

—— 建物も49年開館という予定があったのが、オイルショックで延びたりして、ずいぶんご苦労なされたと思います。

市古 49年にやっと半分、東館だけ建ちましたね。それができた段階で、もう1年くらい間を置いたほうがいいんじゃないかと言われ、すぐその翌年建築を続行すればよかったですけど、オイルショックの問題にひっかかり、延び延びになって、51年度の予算で残る西館を建て、52年3月にやっと完成しました。設立以来5年

経ってやっと開館の運びになったわけです。

—— 研究情報部は発足当初は2室しかなかったのが、3年目にふえました。これは準備調査段階からの構想ですね。

(山中) 初めは情報室と整理閲覧室の二つです。49年に、参考・編集・情報処理の3室がふえて5室になりました。

市古 情報処理の問題がだんだん具体的になってきたものですから、これに本当に取り組むためには情報処理室を設けなければならないと当局に要請して、認められたわけです。情報室は研究情報部の中枢的なものであって、整理閲覧室は実務的なことをするとされてきました。これは文部省で内部組織の案をこしらえるときも、研究情報部については、そんなに研究者は要らないだろうという考えがあって、当初は教授1、助教授2、助手2ぐらいでしたね。それをふやしてもらったのはその後のことです。

ですから、文献資料部は教授、助教授、助手が各室1、1、1という非常にきれいな形ですが、研究情報部は教授が1で助教授が3～4、助手が4ぐらいの構想でしたから、将来やりにくくなると思ったのですが……。そのことについては当局の理解を得るように、かなり苦労しました。そして徐々に定員をふやして均衡を保つようにしてもらいました。途中で整理閲覧部の独立の問題がありましたが、これも改善の一つだと思っています。

その次に骨を折ったのは、コンピューターの導入でしょうね。あれはいつでしたか。

—— 記録を見ると、機械が入ったのは52年12月28日で、53年正月から運転開始です。

市古 じゃ、開館式のほうが先ですね。

—— 52年6月24日に開館式を行なって、実際の閲覧開始は7月25日からです。

市古 開館式の前の年の7月、吉野部長が急に他に移り、渡辺部長に代りました。建物の設計はほとんど終り、これから着工して年度内に完成、52年に開館という予定が組まれている時です。そういう時点で突然部長が交代したのです。創設期の4年余、苦楽を共にしてきた部長の更迭は、困ったのですが、幸い後任の渡辺部長が非常に有能な方で、困難な業務をてきぱきと処理してくださったので、ほんとにありがたかったと思います。

3. 開館から充実へ

市古 52年の開館時はあれこれ気を配らなければならぬことがあって疲れましたが、渡辺部長、金坂(庶務)課長、柴田(会計)課長などがよく働いてくれました。係長などからも、あの時は一番大変だったと最近聞きましたけれども、私自身はそんなに苦勞を感じませんでした。

ただ、パーティーを開くことと、記念品をどうするかなどで、多少苦心しました。記念品については、初め、光悦の謡本の複製はどうかと

提案したんです。開館記念ですから、おめでたい「狸々」はどうだろう、ただそれは3~4枚の本で見栄えがしないというのなら「熊野」はどうだろうなどと説明しましたが、意見を言う人がほとんどありません。そこで第二案として蕪村の扇面画の複製を見せましたら、管理部の人たちがこの方がよいと賛成したので、結局それを記念品に決めました。費用は大分かさむけれども謡本のほうがよいと思ったんですがね。

—— 後で何うと、扇面の評判がよかったそうですよ。

市古 そういう話ですね。

—— 開館式当日はすごい雨が降りました。

市古 あのときは文部大臣(海部俊樹氏)が出席してくださって、大変よかったと思います。これはいろいろな関係があつて、お願いに行ったりしたんですが、とにかく忙しい中をよく来てくださったものです。

—— 記念展示もやりましたね。

市古 ええ。海部さんには全部説明して回りました。自分の家にもこういうようなものがあるとっておられたから、それを見せてくださいと言ったんです。(海部さんの郷里は)愛知県ですね。その後そのまま……。

コンピューター導入と 国際集会・国際交流

市古 開館式が終わって、すぐ閲覧業務を始めて、その次に来るのがコンピューターの問題です。これは当初からプランにありました。それはぜひやらなきゃいけないということで、山中さんに49年に



市古館長(手前左端)の説明で開館記念展示を見る海部文相

ここへ入っていただいたのも、実はそういう下心があったのです。科学方面のことについて明るい人も館に迎えたいとかねがね考えておりましたし、文部省のほうからもどうだというような話があり、(山中さんに)来ていただいたわけです。

そこで何とかして早くコンピューターを導入しなければいけないと考えました。情報処理室の教官たちが非常に熱心に研究を続けてくれているものですからね。そんなわけで努力を重ねて、やっと52年度に(予算が)通りました。52年の初めのころ、文部省へ行きますと、どこ(の部屋)へ行っても、「おめでとうございます」とか「よかったですね。コンピューターが入って」とか言ってくれるんです。それを聞きまして、これがもし有効適切に使えなかったらどうしようか——稼働ミスなんてありますから——そうになったら怒られるんじゃないかと、変な気持ちでした。(笑) おめでとうと言われたのは嬉しかったんですが、後が心配なんです。幸いその後、活発に動いています。これは研究情報部の部長はじめ、情報処理室の人たちのご努力の成果だと思ひ、嬉しく、感謝に堪えないところです。

それと並行して、国際集会の開催がありました。国際集会は前から考えていたことですが、当初の文部省のプランにはそれほど強くは出ていなかったと思うんです。一つは国際交流がだんだん盛んになってきた時代の動きにも関係しますが、それより前から、国文学者の幾人かの長老の方、例えば久松先生はかねがね資料館ができたならそれをやれとおっしゃっていました。設立推進連絡協議会の後身である国語国文学会連絡協議会でも、国際集会の話がちょっと出たことがあります。国立の研究機関ができると、何でもなくそういう集会が行なえるように誤解

なさってられる節もありましてね。けれども実際にはそう簡単には行かないんです。

—— 国際集会は52年に第1回が始まっています。ということは、準備構想をお考えになったのは51年ごろからですか。

市古 ええ。それは今申した通り、かなり前から考えていたわけですし、長老・先輩の方々からも強く要望されていたことです。私もなるべく早く開催したいと思ったんですが、何しろ建物が建たないうちに具体的に踏み切ることができません。それで52年に開館と同時に、この際国際集会をぜひ開こうと考えました。ところが、最初の時は予算がないので、非常に困りました。

—— 確か組織委員会というものを作って、組織委員会主催で……。

(山中) 学術振興会から補助金をもらいました。

市古 多少補助金をもらったり、会計課にも無理を言って金の都合をつけてもらったりして、とにかく開催に漕ぎつけたんです。ところが、その第1回の集会が非常に評判がよかったんです。それで私は力を得て、その後毎年開くことにし、今日に及んでいるわけです。情報室その他の関係の人に大変迷惑をおかけしましたが、お蔭で年を追って盛んになり、順調に発展していると言ってよいと思います。最近^は外国の研究者がこの会に参加することを希望している方がふえているようですし、より一層育てていかなければならないと思います。

それから、これもかなり前から感じていたのですが、外国から来られる研究者に対して、わが国はそれほどきめ細かく心を配っているとは言えない。大学の研究生になって来日する人も少なくありませんが、そういう外国人研究生がどこへ行っているか、どうしたらいいか分らな

いというのではよくないし、窓口をこしらえるべきであると思っていました。そこで国際交流基金にも連絡をとって、「日本文学関係はこちらで窓口になってあげますよ。困った人はみんなよこしなさい」と伝えておきました。国際文化交流という大切なことを資料館の一つの仕事として、窓口になり、あるいは受入れ先になるようにしたいと考えたのですが、皆さんのご協力によって大変うまくいっていると思います。その一環として国際集会の問題が出てくると思います。

—— 近年、国際集会が毎年行なわれるだけでなく、国際交流基金とか学術振興会あたりの援助で、ここを受入れ先にして日本へ研究に来る人も、毎年のようにありますね。

市古 国際交流基金に、困ったら何でも受け入れてあげますよと約束したのは、これは館長としてではなく個人で言ったと思っていただきたいのですが、内心こういう姿勢を持ち続けてほしいと願っている次第です。その点、小山館長は私よりもっと国際的な方ですから大丈夫です。(笑)



第2回国際集会(昭和53年度)

—— ところで外国人研究員としては、初代のキーンさんが52年6月に来ておられますが……。

市古 実は51年の、永井(道雄)さんが文部大臣のころ、キーンさんを客員として迎えてもらえないかという話が当局からありました。そこでわれわれは手筈を整えて、客員の第一号として受け入れたのです。それまでも外国のすぐれた研究者を客員として招きたい、他の共同利用研究所ですべてそういう客員の枠があるようです。ですから、招きたいとは思っていながらも言いそびれているうちに、むしろ文部省の好意から始まったと言っていいと思います。

第1回のキーンさんの後ずっと続いているということは、国際交流の実をあげることにありますし、お帰りになって資料館の宣伝をしていただける。さらに、外国の方々の日本文学に対する考え方には新鮮な方法が感じられたり、またわれわれの盲点をつくようなところがしばしばあるようです。ですからわれわれも虚心に研究上採るべきところは採らなくてはならない。そういうことによって国文学の新しい方法や意義

も発見できるかもしれない、そんなことを考えて、キーンさんの来館を歓迎したわけです。

ただ、キーンさんに大変申訳なかったのは、客員教授という制度がなかったために、外国人研究員という名称で来ていただかざるを得なかったことです。その翌年から、資料館の中で認める場合は客員教授の称号を付することができること

になったんですね。キーンさんの次のミルズさん(53年度)の時は客員教授でした。

—— その次(54年度)がサイデンステッカーさん。

市古 それからフランクさん(55年度)、レヴィンさん(56年度)です。客員教授の方々は皆さん、ここにおられた印象がよかったようで、あとからもお手紙をいただいたりしました。たいそう有意義な制度だと思います。

—— そうですね。その後、来日なさるたびにお寄りになる方もいらっしゃいます。

市古 ええ。フランクさんもこの間(注、57年4月)寄ってくださいましたね。あまり日本の国内だけに目を向けなくて——本来、できた時は国内だけを念頭に置いていたのですが——広く世界に目を向けるようにしないと、共同利用機関としても発展しないのではないのでしょうか。

海外収集と実験講座の問題

—— その意味では、資料の調査・収集も国内だけでなく、国外にも目を向けたいと最初からお考えになったんでしょうね。

市古 それは最初から考えていたのですが、まず国内を集めてから外へ及ぼしなさいと当局から言われたことがありました。これは一つの論理ですね。しかし、国内を撮るのはいつ終わるかわかりません。国内の比較的簡単に行ける所の文献資料よりも、むしろ外国のものこそ早く収集してもらいたいと、収集計画委員の益田勝実さんなど幾人かから強く言われたことがあります。私も全く同感だと言ったんです。国文学者が齊しく望んでいるところで、国文学界の輿論だと言ってもよいでしょう。それで毎年、海外文献資料の調査・収集を概算要求に出しま

したが、なかなか認められませんでした。でも去年あたりから、やや緒に就いてきましたね。

—— はい。リストで注文して現物を購入するという、いわば通信販売的なシステムだけにはできました。ただ、調査ができませんので、なかなか……。特に目録の出ていない図書館が多いので、今のところ、進めにくくて困っています。

市古 もう一つ、残念で仕方がないのは、実験講座にならなかったことです。できたのが早過ぎたために。(笑) 共同利用機関の中では、私たちは二番目でしたからね。

—— 二番目で最初の文科系だったわけですね。

市古 創設当初に非実験だったために、なかなか実験講座にならない。3～4年前からいろいろな会議で言ってきましたし、審議官が出てきたときも強く申したことがあるんですが、一旦非実験講座として出発すると、しかるべき時期が来るまでどうしようもないらしい。非常に残念なことの一つです。

—— ただ、国語研究所なんかは、共同利用機関じゃありませんが、一部実験化が実現したんですか。そのほかにも非実験から実験になった例があるのなら、われわれも望みを持ちたいと思います……。

市古 非実験から実験になっているのは、史料編纂所が去年ですか。

(大野) 昭和52～53年から、特殊史料部、古文書・古記録部と近世史料部の三つです。大部門制を敷いて……。

市古 われわれのほうもフィールド・ワークですから。ただ、フィールド・ワークは掘らないといけないらしいんです。(笑) 考古学なんかがそうでしょう。ことに外国に行って掘るとい

うことはいいんですが、日本で本を見て歩くのはフィールド・ワークにならないらしいね。

—— 美術史などが部分的にはなっているようです。必ずしも掘らなくてもいいんでしょうけど。

市古 それはやはりバランスを考えているらしくて、大学に国文学の講座が多いのは不幸なことです。だから私は、共同利用機関だけでいいじゃないかと言うのです。(国文学の)共同利用機関はここだけですからね。

—— タイミングがあるんでしょうね。

市古 ええ。(東外大)AA研が一昨年、一部あったんですが、途中からというのはなかなか困難な面があるらしい。ただ、望みが無いわけじゃないと思っています。

それからもう一つ、コンピューターがあるのは実験になっていいはずなんだけれど、コンピューター関係だけ実験になって、よかったと言ってしまうと、後はならなくてもよいということになってしまう惧れがあるから、そこを気をつけなければならない。

実は、それを私は3年ぐらい前は知らなかった。こちらのほうの教官には理学部の出身の人もある。東大の助手をやっていた人は、向こうにいるときは実験講座の研究費をもらっていて、こちらに来ると、同じ仕事をやっていて非実験予算というのは実にけしからん話だ、せめてコンピューターだけよこせと言ったのですが、そういうことは却って損かも知れないと、去年あたり聞かされました。一括して全部なるという前提で、まず、コンピューターが、と言うのならいい。それを、これだけが通りやすいと言って通してしまうと、後がまた長くかかることになる。予算が伸びる(成長する)時に慎重にやることが必要だと思うな。

(大野)フィールド・ワークの必要性を相当強調して、やらねばなりませんね。

市古 ええ。フィールド・ワークは本当に必要です。事実、史料館に限らず国文のほうだっでやっているわけだし、そういうものでふえれば、研究費が潤沢になり、採訪旅行に参加できる回数が多くなるわけでしょう。これはぜひやらなきゃいけないと思うんですが、力及ばず残念です。

—— この問題は次の10年の課題として、新館長に引き継いでいただかなければならないことだと思います。

市古 文献資料部の第四室に客員教授を置くことや外国人研究員の招聘などは意外とうまくいったんですがね。実験講座に切り換えられる日を待望しています。

大学院協力や国文学の普及など

—— それともう一つ、ここは大学院教育に協力するということが法律にもあり、現実にも始めていますが、これは共同利用機関になった構想のころには、考えとしてもう生まれていたわけですか。

市古 ええ。「資料センター」と言っていたころの構想にはなかった。ところが、共同利用機関になるには大学院教育を入れないといけないので、付け加えたのです。しかし、後からの追加だからと言ってそれを決して無視するものではなく、大学院の教育に協力するという姿勢は持っていたのですが、ことに最初の3～4年はあまりこのことに触れませんでした。なぜかと言うと場所がないからです。建物が建たず、場所がない時に、指導するわけにはいかないと思ったのです。法令には「大学の要請に応じ、当該大学の大学院における教育に協力すること

ができる」とあって、絶対的な要請ではないと
考えていたんです。それでも民族学博物館では
早くから大学院の指導を行なっていましたが、
われわれのほうではしばらく見合わせていたの
です。

—— 一つは、大学にそういう分野の講座が
多いか少ないかの問題もありましょう。

市古 そうですね。資料館では全部の建物が
完成して開館してから大学院学生の指導を始め
ることにしたんです。初め東京及び周辺の国立
大学の大学院学生でしたが、翌年から公立を加
えました。民族学博物館も最初は大阪大学と関
西大学の二つでしたが、今年から大学院を限定
せず公募に切り換えたそうです。公募に切り換
えた場合、何人ぐらい受入れ可能か検討しなけ
ればなりませんし、大学院学生の研究する場所
をどうするかなど、いろいろな問題があるわけ
です。けれども資料館でも、将来は公募という
方向へ一步一步進んで行かなければならないよ
うに思いますね。

—— それは、建物の拡充や、建物以外のい
ろいろな意味の拡充があって、それと並行して
充実していかなければならないと思います。

市古 そう。そうでないと、今までのように
指導教官の部屋でやっていると、資料館のほう
のこと(各部室のいわゆる業務)と一緒になっ
てしまいますから、大変やりにくいと思うんです。

—— 私どもめいめい、研究も、必要があれば
教育も、その他学問の普及などにも力を尽く
すべきだと思いますが、いろいろな意味でさら
に拡充・充実しつつ、現在の大学院教育協力も
まだ十分ではないけれど、やっていきたいと思
います。

市古 できる範囲でね。ただ、場所(部屋)の
問題が一番大きい。大学院の人たちが来ても室

や机が与えられないということがあるもので
から……。

—— さて、学界と言うか、利用者の問題で
すが、現在、多くの研究者に利用されていて、
10年経って一応軌道に乗ったと言ってよろしい
ですね。

市古 そう。最近はいいようですね。開館当
時は本当に来る人がいなくて、困ってしまった
んです。一日にせいぜい10人前後だったでしょ
う。整理閲覧室長が苦心して入館者の増加をは
かっていたことを、つい昨日のように思い出
します。入館者が少なかったのは、開館したばかり
で知名度が低いことと土地のなじみがないこと
や、どんな資料を所蔵するか分らないことなど
が原因だったと思いますが、それでマイクロ
目録の簡略版や収蔵古書の簡単な目録などを
作って配布したこともありました。公開講演会
——学会もそうです——を開いて、なじみがあ
るようにするなど、大変な苦心でした。

公開講演会は普及ということも考えたのです。
初めは朝日講堂や主婦の友会館などで開いて
いたのですが、52年の開館以後は、本館会議室で
行なっています。昭和47年の創設後間もない時
期に早速公開講演会を行ないましたところ、評
議員の方から注意を受けたこともあります。文
献資料を集めて研究するところなのに、どう
してそういうことをやるのか、通俗すぎる、と。
そのとき私は言ったんです。もちろん主たる業
務はそちらのほうである。しかし、資料館は国
文学の一つの代表的な機関であるとすれば、国
文学の一般への普及を忘れてはならない。今日
古典離れが著しいと言われている。国民から見
放されるような日本文学、古典文学であっては
ならない。なるべく古典に親しみを感じるよ
うにしなければいけない。同時に、講演する人に

は大変だと思うけれど、学術的に水準の高い内容を分りやすく話してもらおう。専門家も聴きに來ますから。それは非常に難しいことであるけれども、学者もそういうことを心がけていいはずだ。そういう公開講演会を行なって社会に還元しないといけないのではないか、と。これが、当時の私の考えでしたが、今も変わっていません。

—— その後、公開講演会も回を重ねて、近年は東京以外の地でもやっていますし、秋に3日連続の講座的なものも開いたりするようになりました。

市古 あれ(秋の連続講座)は非常に定着しましたね。もう一つ開きたいのは、史料館で行なっているような講習会です。文献の取扱い方などを主としたものを行ないたいと思うんですが、まだ実行するに至りません。将来は考えてもいいかもしれませんね。

—— 中の者も、和古書取扱い講習はあっていいんじゃないかと、常々話題にしています。

市古 調査員に配っている手引があるでしょう。あれ、初めのうちは悪口を言ったけれど、割合いい。(笑) だんだんよくなりましたね。

—— ああいうものも学界の役に立つなら、役立て方は検討していいかもしれませんね。

市古 ええ。研究室であれを欲しいと言う人もあるわけです。書誌学のイロハのイぐらいのところが書いてあるわけだから。

—— 教材利用の許可を求められたことがあり、確か館長にご相談して許可したことがあったと思います。

市古 資料館は国の一つの機関ですから、もちろん研究が中心ですが、同時に広い範囲の普及ということも考えないといけないと思います。

年鑑と古典籍総合目録事業

—— 次に、現在『国文学年鑑』という名前になっている文献目録について、少しお伺いしたいのですが……。

市古 あれは資料館ができて間もなく、48年から編集を始め、年度の終りに昭和46年の分を出しました。人が少ない時です。なぜそれを始めようと思ったかと言うと、38年から45年までは東大の国文学研究室で編集していました。助手や大学院生の諸君が献身的に従事してくれたのです。こういう出版物は、情報過多の今日、絶対に必要ですが、片手間にするのは容易ではありません。公共事業と言うべきものです。それで資料館ができたなら早く移したいと思っていました。だいたい下地はできているものですから、東大で『研究文献目録』を作った人々に協力してもらって、『国文学研究文献目録』を出し始めたのです。

—— 当館設立と同時に先生はそれを構想され、企画されたわけですか。

市古 ええ。そうせざるをえなかったようなところもあるんです。東大の研究室で作り始めたのは、助手の人がぜひしたいと言ってくれたからでしたが、報酬は印税だけで、いくら国文学の進歩のためと言っても、編集の人には大変気の毒なことをしたと反省しています。けれども、一旦出した以上、途中でやめるわけにも行かない。資料館のほうなら、人手も豊かですから、こちらへ移してよかったと思います。最近どんどん充実してきていますね。岡さんは48年はやらなかったんでしょう。

(岡) 再校が出始めたころ、ここへ入って來ました。

市古 じゃ、久保田(淳)君、篠原(昭二)君な

んかとは、48年からのつき合いですか。大変ご苦労様です。(笑)

(岡) 今はコンピューターと結びつけてやっていく方向で、かなりいい方向に進んでいると思うんです。

市古 そうですか。あれも年を追って充実してきて、どんどん厚くなるじゃないですか。——ページ数がふえたことを充実と思われたら困るんだけど、『年鑑』はほんとにうまくいったと思いますよ。

(山中)「古典籍総合目録」のことも……。



市古 あれが始まったのは、3年くらい前かな。これは渡辺部長が非常に力を入れて予算を得るために骨折ってくださったんです。

—— 54年度に整理閲覧部が独立してその翌年、55年度から予算がついて、仕事が始まりました。

市古 「古典籍総合目録」は、初めから下心があったものなんです。かつて『国書総目録』が出たとき、いろいろ間違いはあったが便利がられました。ただ、それに用いた資料は昭和30年ぐらいまでのものですから、『総目録』未収の資料がたくさん出ているわけです。そういうものは『国書総目録』に追加すればいいんですが、

もともとあれは国家的な事業だと言われているのを一書肆が損得を度外視して記念事業として刊行したもので、追加補遺などは不可能なことです。(これも大変な仕事ですから)それを受け継ぐとは決して言いませんが、先ず『総目録』未収の文献を集め整理することから始める。そしてそれを学界に利用してもらう。それから『国書総目録』所収の資料を調査・再録し、全部合せた日本の古典籍の総合目録をこしらえる、という計画です。これは非常に大きな国家的な事業だろうし、外国でもそれを非常に望んでいるようです。大英図書館では同館所蔵のおびただしい江戸時代前期の版本の書誌を作製しているそうですが、聞くところによると『国書総目録』を不可欠の参考書としているそうです。

—— 最近欧米の図書館で和古書の整理に乗り出しているところがいくつかありますが、そういったところではどこでも、目録原稿に『国書総目録』を“KS”として、「KS何巻何ページ何段」と付けています。

市古 そうですか。あれは間違いもあります。一応の目安にはなると思います。ただ、その後に出た図書館の目録などがかなりの数に上っており、『総目録』に入っていないものが少なくない。そういうものから始めて、明治以前に日本にどれぐらいの本があったか、息長く事業を続けて行く必要があると思いますね。

しかし国書の中の国文学だけに限りますと、どれが国文学の書かということが問題になって、そのために非常に神経を使わなければならない。また、その国文学書の認定は誰がするのか、随分人によって違いますし、時の推移に伴って国文学の枠が動いて行くことも考えられましょう。だから国文学の範囲を超えて、日本の古典籍ということで、明治元年以前に日本人

の作った書物を総合したほうがはるかに将来性もあり、便利だと思うのです。そう考えたのですが、国文学研究資料館で国文学を超えた文献の目録を作るのですから、その事情を文部省の方にも次のように話しましたところ、非常によく理解してくださいました。(これにも大いに感謝しています。)例えば江戸時代に医者で文学者という人がいる。その人を研究するとなると先ず伝記を知ることが必要ですが、その著作には医書があるかも知れず、そういうものについても調査しなければならない。平賀源内なんかも科学者でそして文学者ですね。そういうこともあって、文学書だけでは研究によっては不十分である。国文学の枠を守っていたのでは遅れをとってしまう。一方現在は学際的研究が盛んですし、それらの諸点を考えると、大きく網を広げて、全部の古典籍を網羅したほうが有効だ、と説明したわけです。

これを国文学研究資料館で行なうのは大それたことのようにですが、かつて『国書総目録』は国文学関係者が中心になって作った。将来はいろいろな分野の人に協力を仰ぐにしても、そういうものをリストアップすることは可能です。そういう能力を国文学者は具えていると思う。これこそは世界的な大きな仕事ですよと言って、10年継続の特別事業として認めてもらったんです。時期も非常によかったと思いますね。新規事業をほとんど認めない今日では、絶対にだめです。(笑)ただし、定員はつきませんでしたので、今後資料館内で苦勞なさると思うけれど、急がないで、50年ぐら以後にはすばらしいものができるように、ひとつお願いします。

—— しかも、この館にあるコンピューターを使って編集しようということですね。

市古 ええ。コンピューターという利器があ

るものですから。もっとも、私がそう言うだけで、実際にやる方がどうか、その辺はよく知りませんが、何としてもコンピューターに入れるべきだと思います。そうすれば、『国書総目録』を作った時よりはもう少し苦勞が少なく、能率的にいくかもしれませんね。

—— 当座は『国書総目録』の続編というか、補遺版をまず第一にして……。

市古 一番手っ取り早いのはそうですね、しかしそれだけで終わるのではなく、あれを包含する大きなものにしていただきたい。『国書総目録』はいろいろ足りないところがある。それを補充してほしいことが少なくありません。江戸時代の版本について最近調査が進んでいますが、それに伴って出版書肆の研究が行なわれています。そのためには「刊記」がほしいのですが、『総目録』ではこれを付けませんでしたが、「刊記」を付け加えるのは大変だと思いますが、将来、どのような形でもいいから付けてほしい。書物の所蔵者の移動なども、できるだけ追跡してほしいと思いますね。これまた非常に困難なことでしょうが。

同時に、翻刻の有無、その本がいつどこで翻刻複製されているかも調査して示してもらいたい。昭和20年以後の国文学関係の翻刻文献の総覧を現在日本古典文学会で編集中ですが、国文学だけでも相当な数量に上ります。まして、あらゆる書にわたっての翻刻文献を採録するのは、それだけでも全く大変なことだと思いますね。

共同研究

—— もう一つ、共同研究について。これは予算がついてスタートしたのは、52年でしたが……。

市古 共同利用機関は共同研究を一つの柱に

考えています。ことに自然科学系の共同利用機関ではそれが非常に強いのです。ある一つの機械を使って共同研究を行なうということです。国文のほうでもそれを初めから考えたのですが、共同研究は非常に困難です。文学の研究は共同研究とはなじまない面があるからです。書誌学・文献学的なものだとまだいいんです。それでもだめだ(できない)と君たちは言いたいだろうけれど(笑)……。そうかと言って、しかし今、共同研究は、共同利用機関に課せられた使命、一つの柱みたいになっているんですね。共同利用機関には共同利用と共同研究があると思います。あるものをお互いに利用して共同研究するのではなく、それをみんなで利用し、それぞれ研究する、そういう共同利用が当館の主たる目的だ——これも共同研究だと言えないことはありませんが——と考えています。ただ、共同利用機関としては共同研究が一つの柱と考えられていますし、また共同研究も国文学者として取り組まなければならぬ一つの課題でもあるわけですから、やや後れて52年度から共同研究を始めました。

その時、共同研究の題目について、委員会等で協議しましたが、資料館としては資料を使って共同研究をやったらどうかということになり、解題が先ず取り上げられたのだと思います。ところが、世間一般の人は「解題」という言葉になじまず、解題は研究であるか、ないか、ということを使うんです。昨年当館を調査に来られた方から同様の疑問が出され、私は研究の一分野だと十分説明しました。その時は納得して帰られたのですが、依然として解題は研究ではないという人もいましたね。

—— 解題というのは研究の結果書くもので、研究がなければ解題は書けないはずですね。

市古 そうです。内容を知らない人が、何が何ページありますと、ただ物理的に測ったものは、解題じゃないと思います。これがなかなか一般の人には分らない。世間には安易な解題と称するものがたくさん出ているからでしょうね。ですからある時、この館の中で、「解題」という語をやめて「文献学的研究」か何かにしなさいと言ったんです。そうすればそれでいいわけです。言葉の上だけのことで、くだらないことだと思いますが、世の中にはそう言ってもいられないことがあるものですから。

そういうことで解題研究を始めました。これは担当なさった方には大変なご迷惑をかけたらしい。ですけれど、初雁文庫の解題はいいものですし、今度は俳書解題が出るそうですね。ああいうものは決して単なる作業じゃない。やはり共同研究です。みんなで共同して、若い人達と共同研究して、育てていってもいいと思うんです。そういう共同研究として伸ばしてもらいたいけれど、同時に、公募という問題が起こっているわけです。今までも適任者を公平に選定しているはずですが、多少は公募という問題を入れてもいいですね。最近、今年からなさったとか……。

—— 今年から一部、公募を取り入れることになりました。

市古 伺うところによると、たいへん希望者が多いそうですね。そういう方向もうまくいけばいいと思うんです。

—— かつてやった解題研究も、あの種の研究はそれなりに、つまり一人ずつがやるよりも、共同研究の形でやって、有益だったろうと思います。

市古 解題は中年の人でももう一遍やり直したほうがいいんじゃないかと、最近つくづく

思っているんです。一緒に作業しているという
いろいろ伸びるわけです。中心になって進めて行く
人は大変でしょうが、そんなことを言わないで、
指導して、解題を発達させることはいいこと
じゃないでしょうか。

—— 研究するという過程と研究成果を世に
出す過程とは一つ別ですから、研究するのは誰
にとってもその人なりに有益だったろうと思
います。これは今後もそうあるべきだし、あると
思います。

市古 そうあってほしいと思います。皆さん
にそれぞれプラスになりながら成長していつ
てほしい。ただ、そのしわ寄せが資料館の人た
ちのところへ来るとなると、私は何とも言え
ないんだけど、そうお考えにならないで、ひ
とつやっていたきたいと思います。

(一同) (無言でうなづく)

4. 終 り に

—— こうして今日、設立前からこの10年間
のことを、いろいろお伺いしたわけですが、最
後に、この4月に一応お引きになって、数箇月、
外から資料館をご覧になって、今後資料館がど
う進むべきかというアドバイスをいただけませ
んか。

市古 いや。注文はちっともありませんし、
辞めた者はあまり何も言わないほうがいいだ
ろうと思って、慎しんでいるわけです。ただ、
みんなの力で建てたということが原点で、国
の内外を問わずあらゆる日本文学の研究者
の利用に供するという——もちろん大学を中
心としてですが——、これはやはり皆さんの
念頭に置

いていただきたいと思います。そして、先輩
達が(一番大変だったのは1年か2年の間
ですが)非常に苦勞なかってこしらえたもの
ですから、それについての不平なども時に
出てくるだろうと思うけれど、そうじゃ
なくて、なるべく皆さんの利用に供す
ることに努力していただければ、大変
ありがたいと思えます。

また利用だけでなく資料の提供につ
いても必要があると思うので、国文学
者全体の協力で、この資料館を大き
く育ててほしいと思えます。館内の
人はそういう国文学界の総意を受け
て実際的に処理するのだ、そして一
緒に壮大な国文学の殿堂を築くの
だという考えで、これからの難局
を切り抜けていただきたいと思います
ですね。

10年間経って、マイクロフィルムも
5万点くらいになったのでしょうか。
そろそろいいコレクションになっ
てきていると思うんです。

—— それでも全体計画の10分の1
でしょうか。

市古 やはり100年経たないとだ
めでしょうね。(東大)史料編纂所
は100年ですから。あのくらい
になれば史料編纂所よりはもっ
とよくなるかも知れないと期
待しています。(笑)

最後になりましたが、私のいる間、
不慮の事故でお二人の(注、大久保
正・榎本宗次両氏)、それと病
気でお一人(注、鎌田永吉氏)の
方が亡くなりました。同志とし
て一緒に努力していただいた
方が、中道とは申しませんが、
こういうことになって、私にと
って非常に衝撃でした。心から
ご冥福をお祈りいたします。

—— 長時間、どうもありが
とうございました。